FÄHRHAUS HOFEN

（ホーフェン渡し場跡の案内板：Bürgerverein Hofen e.V.　より）

訳・調整：釜澤克彦

現在の渡し小屋

洪水の水位を刻んだ旧渡し小屋。最初の渡し舟の記録は 1350 年頃

1935 年の堰を備えた橋の完成以前は渡し小屋からネッカー川までの高度差は 1.5 から 2 メートル、距離は 24 メートルであった。

渡し守アドルフ・ラウ
1930 年

今も戸口の梁に読み取れる1813年という数字はおそらくこの小屋の建設年であろう。入口ドア枠の洪水水位のマークは、ネッカー川の改修以前は何世紀にもわたりネッカー川の洪水が谷間の建物を水浸しにしていた。今はほとんど読めない渡し小屋のマークは 1851、1853、1870、1882、1906，1919 そして 1931 年のもの。それ以前の世紀のものはどこにも記されておらず、おそらく以前の建物撤去の際に失われたと思われる。

すでに1350年にはホーフェンにおける「渡し」の記録が残っている。渡しの営業からエバーハート一世伯は年 3 シリングの用益料を徴収していた。「Fergen（船頭）」と呼ばれた渡し守は伯爵の雇人たちを無料で渡すよう義務付けられていた。

王室の道路・橋・水利事業部局により馬車の渡しも整備され 1811年10月15日開通する。総費用は 1556 グルデン 30 クロイツァーに達した。

1910 年頃の旅客用渡し舟

1912 年頃の渡し場

1930 年頃の渡し

渡しの舟はカンシュタット Cannstatt の王室事務所からホーフェンのマテス・ローラーMathes Rohrer に年 85 グルデンで貸し出された。渡し守は当時 106 人のホーフェン住民やミュールハウゼン、エフィンゲンの住民から渡し賃として決まった量の農作物を徴収していた。他の旅行者は 1～2 クロイツァーを払っていた。

夏季は 5 時から 22 時、冬季は 6 時から 21 時の営業だった。稼働していたのは旅客用の舟と馬車輸送用の舟だった。マテス・ローラーの他に渡し守としてはリヌス・シュテッターLinus Stetter、ヨーゼフ・ウーバーJoseph Uber、ヨーゼフ・トライバーJoseph Treiber がいたことが知られている。リヌス・シュテッター(1857-1897)はヴォルフ牧師がこの渡し守と結んだ契約で言及されている。彼は年100マルクを受け取るかわりに福音派のミュールハウゼンからカトリックの子供や大人を無料でネッカー川を越えさせ、この人たちがホーフェンでカトリックの宗教授業つまりミサに参加できるようにしなければならなかった。最後の渡し守はアドルフ・ラウで、1924 年から 1933 年まで渡し守だった。1934 年ネッカー堰と橋の建設とともに渡しの営業は停止された。渡し小屋は現在私有となっている。

渡しのあった頃多くの人や物資が渡されたネッカー川辺の活気ある生活は、時に寒気や凍結、大水などもあったがホーフェンの人たちには大事な生活の刺激であるだけでなく、出会いの場でもあった。

H. ガイガーと F. シュライヒ、ミュールハウゼンに向かう渡し舟での結婚式

ヨーハン・ルートヴィヒ "ルイ" ウーラント（1787. 4. 26 チュービンゲン生まれ、1862. 11. 13 チュービンゲン没）ドイツの詩人、文学研究者、法律家、政治家。

Auf der Überfahrt

Über diesen Strom, vor Jahren
Bin ich einmal schon gefahren.
Hier die Burg im Abendschimmer,
Drüben rauscht das Wehr, wie immer.

Und von diesem Kahn umschlossen
Waren mit mir zween Genossen:
Ach! Ein Freund, ein vatergleicher,
Und ein junger, hoffnungsreicher.

Jener wirkte still hienieden,
Und so ist er auch geschieden,
Dieser, brausend vor uns allen,
Ist in Kampf und Sturm gefallen.

So, wenn ich vergangner Tage,
Glücklicher, zu denken wage,
Muß ich stets Genossen missen,
Teure, die der Tod entrissen.

Doch was alle Freundschaft bindet,
Ist, wenn Geist zu Geist sich findet;
Geistig waren jene Stunden,
Geistern bin ich noch verbunden.

Nimm nur, Fährmann, nimm die Miete,
Die ich gerne dreifach biete!
Zween, die mit mir überfuhren,
Waren geistige Naturen.

渡し場 ― そしてこの詩はどのように生まれたのか：
ルートヴィヒ・ウーラントは 1823 年おそらく最後の機会としてホーフェンからミュールハウゼンに渡し舟でネッカー川を渡った。その際チュービンゲンの学友フリートリヒ・ハーププレヒトそして伯父クリスティアン・エバーハート・ホーザーと一緒にここを渡った若き日の思い出に激しく揺さぶられ、「渡し場」の詩を作った。
この詩に描かれた人物は大変興味深く、ここに紹介したい。

「前者は現世で静かに生き 静かに世を去った」というのはクリスティアン・エバーハート・ホーザーで、1753 年チュービンゲン 生まれ、1800 年から 1813 年没するまでシュミーデン教区の牧師であった。彼はルートヴィヒ・ウーラントの名付け親であり母親の兄だった。ルートヴィヒ・ウーラントは若いころからの友人フリートリヒ・ハーププレヒトと一緒によく伯父を訪ねていた。ルートヴィヒ・ウーラントと伯父クリスティアン・ホーザーそして友人フリートリヒ・ハーププレヒトはフォイアーバッハで牧師ヨーハン・ゲオルク・シュミートに嫁いでいる父の姉ゴットリービン・シュミート（旧姓ウーラント）をよく訪れた。シュミーデンからフォイアーバッハへの散策に最短の行程はホーフェン経由でネッカー川の渡しを利用するものだった。

二人目の「…皆に先んじて奮闘し 戦いと嵐の中に倒れた…」同乗者は激動の人生と苛烈な運命を生きた。フリートリヒ・ハーププレヒトは 1788 年シュトゥットガルトに生まれ、ヴュルテンベルクの著名な法律家一族の出身である。（ウーラントと）ともに法学を学び、ロマン派の詩作に熱中した。この二人の学生は互いをよく理解し多くの時間を共に過ごした。遠出や散策のとき二人はウーラントのシュミーデンに住む伯父など親戚を訪ねたりした。ウーラントが 1808 年 5 月学業を修了できたのに対しハーププレヒトは志願して軍人となった。1809 年には早くも彼は多くのヴュルテンベルク兵とともにナポレオン側についてオーストリアと戦った。彼は二十才になったばかりの若い将校で、理想に燃え、激しやすく、誇り高く美しい青年であった。1812 年 9 月 7 日 Moja での戦い（訳者注：ボロジノ会戦の日であり、付近の地名と思われる）で彼の軍歴は終末を迎えた。彼の右足が砲弾で打ち砕かれたのだ。それでも野戦病院では被弾した右膝上部から切断した。数名の部下の献身により奇跡的にベレジナ河を越えることはできた。そこから彼は介護も十分な衣服もなく馬でとぼとぼと進んだ。厳寒の中を 4 日間やっと味方に合流したとき彼は左足も凍傷になったことを指揮官の中将に平然と報告した。軍は Wilna に二日間留まったあと退却を余儀なくされ、彼は取り残されるしかなかった。彼は 25 才の誕生日、1813 年 1 月 10 日に亡くなった。

ヴォルフガング・ツヴィンツ　2015 年